# 近代の女子教育に尽力した下田歌子（１８５４―１９３６）

## 女性が活躍しはじめた明治時代

明治時代というと男性が活躍した時代という印象です。実際に政治も行政も経済も歴史に名前が記録されている人物の大半は男性であることは間違いありません。しかし明治時代の前半は西南戦争、日清戦争、日露戦争などが頻発した社会情勢の影響で男性の活躍が目立ちますが、天照大神を代表として日本では女性が古代から活躍しており、明治時代も後半になり社会情勢が安定してくると次第に社会で活躍する女性が登場してきます。

潤野（ウルノ）炭鉱を買収、加島銀行や大同生命を創業、日本女子大学を創設した廣岡浅子（一八四九～一九一九）、鈴木商店を再興、神戸女子商業の設立を支援した鈴木よね（一八五二～一九三八）、六歳でアメリカに留学、津田塾大学を創設した津田梅子（一八六四～一九二九）、吉本興業を創業した吉本せい（一八八九～一九五〇）などは有名ですが、歌人として活躍、女子教育を振興して実践女子大学を創設した下田歌子も傑出した女性でした。

## 幼少から能力発揮

歌子は幕末の安政元（一八五四）年に美濃国恵那郡岩村藩（岐阜県恵那市岩村町）の藩士平尾錄（じゅう）蔵と房子の長女として誕生し、鉐（セキ）と名付けられました。祖父も父親も尊皇の立場であったため、明治維新まで祖父は越後高田に幽閉、家督を継承した父親は自宅で蟄居謹慎とされるなど一家は不遇でした。このような失意と貧困の境遇でしたが、両親と祖母は鉐を厳格かつ熱心に教育した結果、鉐は心豊かな女性として成長していきます。

その効果を象徴する逸話がいくつもあります。六歳のときに鈩が玩具の小銭を一生懸命貯蓄するようになったので、祖母が理由を質問すると、この金銭を役人に手渡して父親を赦免してもらうのだと返答したということです。また中国の『二十四孝』という書物に両親が蚊に刺されるのを防止するため子供が裸になって自分に蚊を集めたという逸話があり、それを学習した鈩は母親や祖母のために同様のことを実行したという逸話もあります。

さらに祖母による俳句や漢詩や和歌などの教育の効果もあり、五歳のときに「元旦は／どちらを向いても／お芽出たい／赤いべべ着て／昼も乳飲む」という和歌を創作しています。社会の動向にも敏感で、安政五（一八五八）年に欧米五カ国と修好通商条約を締結した大老の井伊直弼に不満をもつ武士が安政七年に井伊を暗殺する事変が発生したとき、その情報を入手した鈩は「桜田に思い残りて今日の雪」という俳句を記録しています。六歳のことです。

## 皇后の女官に出世

明治維新となって一家の立場は好転し、明治四（一八七一）年に祖父と父親は明治政府に出仕することになり、一六歳であった歌子も一緒に上京します。この道中でも芸術の能力を発揮し、美濃から三河への国境にある三国山越えをするとき「綾錦／着て帰らずば／三国山／またふたたびは／越えじとぞ思う」という和歌を記録しています。東京で立派に成功しなければ帰郷はしないという決意を表明した内容で、現在、山頂には歌碑が建立されています。

東京では漢籍や古典は祖父から、和歌は八田知紀などから指導され能力を向上させていきますが、それらの人々の推挙により歌子は明治天皇の皇后に仕える女官に推挙されます。そのときの覚悟を表現した和歌が「敷島の／道をそれとも／わかぬ身に／かしこく渡る／雲のかけはし」でした。このような才能を皇后に評価され「歌子」という名前を下賜され、さらに皇后の学事に陪席も許可され、その結果、多数の人々との親交が進展していきました。

二五歳になった明治一二（一八七九）年に歌子は剣客として有名な丸亀藩士であった下田猛雄と結婚し、宮中から退出します。しかし猛雄が病気になり生活に苦労しますが、宮中での活動が上流社会に伝播しており、子女教育の人材を探索していた政府高官が歌子に注目します。そこで歌子は政府要人の支援により「桃夭（トウヨウ）学校」を開設し、上流階級の子女の教育を開始します。桃夭は桃の若木のような女性を育成することを表現した言葉です。

明治一七（一八八四）年に猛雄が死亡しますが、翌年、皇后の意向により上流階級の子女の教育のための「華族女学校（学習院女学部）」が創設され、歌子は教授に任命され、さらに翌年には学監となって校長を補佐することになりました（図1）。しかし一方で困難にも直面します。弟に出版会社を開業させ、自身で編集した『小学読本』を出版しますが、ある議員の画策により学校での採用を拒否され膨大な借金を背負ってしまったのです。

図１　下田歌子（1886 年頃）

## 欧米に視察旅行

そのような苦労もありましたが、明治二六（一八九三）年に明治天皇の皇女である常宮と周宮の両内親王の御養育主任佐々木高行から皇女教育のために欧米の教育事情を視察する役割を拝命します。同年九月に横浜から出航し、最初にイギリスのブライトンで語学学校に通学して英語を学習し、一二月にロンドンに移動します。そこでヴィクトリア女王の女官であるＥ・Ａ・ゴルドン夫人に出会い、女王の孫娘たちの教育の状況を視察します。

本来は皇女の教育の状況を視察することが目的でしたが、一般の女子の教育にも関心があり、翌年にはチェルトナム女子大学やケンブリッジ大学付属のニューナム女子大学、さらには女子教員を養成することを目的とするケンブリッジ訓練大学、それらを卒業した学生が進学するケンブリッジ大学付属ヒューズ大学などを次々と視察するとともに、スコットランドの湖水地方、フランス、ドイツ、イタリア、オーストリアなどにも旅行します。

イギリスに滞在している期間にはバッキンガム宮殿でヴィクトリア女王に拝謁する機会がありました（図2）。当初、そのような予定はなかったため礼装のドレスの用意がありませんでしたが、日本で宮中に参内するときに着用していた袿袴（ウチキハカマ）を持参していたので、それを着用したところ、日清戦争開戦の直前でイギリスでも日本への関心が高揚していた時期でもあり、日本古来の礼装であると評判になりました。

ヨーロッパからアメリカに移動し、アメリカ大陸を横断して帰国します。この視察の結果、国家の発展のためには上流階級だけではなく一般庶民の学校教育も重要であることを痛感するとともに、その内容も女子を対象とした教養科目だけではなく専門科目も重要であり、知育や徳育とともに体育も必要あることを確信するようになります。このときの経験が後述するように自身で女子のための学校を創設する動機となります。

図２ ヴィクトリア女王
（1819-1901）

## 自身で女子学校を創設

帰国した歌子は明治二九（一八九六）年に二人の内親王教育掛に任命されますが、いくつかの面倒に巻込まれます。まず侍従長徳大寺実則が歌子は欧米視察の期間にキリスト教徒になったのではないかと疑惑をもちますが、これは否定されました。さらに修学年齢になった常宮の教育方針について宮内省内で意見の対立が発生したため、二年が経過した明治三一（一八九八）年に自身の教育理念を遂行するため「帝国婦人協会」を設立し会長に就任します。

視察で実見した欧米の社会と比較して、当時の日本の社会では男女の格差がありすぎるため「日本が一流の大国となるためには大衆女子教育こそ必要」というのが協会の設立の意図でした。その目的を達成するため、翌年には東京市麹町区に本部を開設し、協会の事業として「実践女学校（実践女子学園）」と「女子工芸学校」を設立し、さらに新潟に「裁縫伝習所（新潟青陵学園）」、東京に「順心女学校（順心広尾学園）」を次々と創設していきます。

その意気は実践女学校規則の「本邦固有の女徳を啓発し日進の学理を応用し現今の社会に適応すべき実学を教授し賢母良妻を養成する」という言葉に表現されています。現在の風潮からは異論があるかもしれませんが、一二〇年前の社会では革命ともいうべき目標でした。さらに欧米視察の影響により、歌子は社会を国際視点から理解していました。日清戦争が終了し、清国から多数の若者が留学してきますが、実践女学校は率先受入れてきたのです。

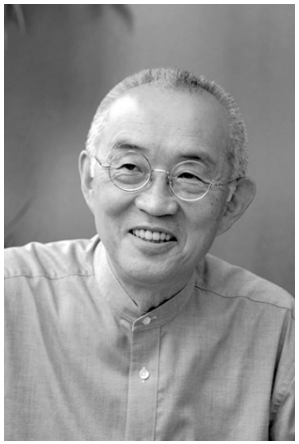
## 社会の支援に活動を拡大

これらの教育活動以外にも、歌子は様々な社会活動を実行しています。日清戦争が終了し、社会に多数の遺族や負傷した兵士が発生しました。それらの人々を救済するため、幕末に男装で尊王攘夷運動に活躍した女傑の奥村五百子（図３）が明治三四（一九〇一）年に「愛国婦人会」を創設しますが、歌子は設立に協力します。愛国婦人会は以後も日露戦争や第一次世界大戦の遺族救済だけではなく、関東大震災の救済や復興支援にも活躍します。

図３　奥村五百子
（1845-1907）

一九二〇（大正九）年に歌子は奥村の後継として会長に就任、婦人職業紹介所、保育所、授産所などを開設して女性の就業のための基盤を整備し、四年後には学校で勉強できない貧乏な勤労女性のため愛国夜間女学校を創設、さらに大日本実修女学会を設立して勉強の機会のない女性のため「実修女学講義録」を刊行して勉強できるようにしています。その活動範囲は日本の領土であった樺太、朝鮮、満州にまで拡大し、視察や講演をしています。

このように活動範囲は広範に拡大していきますが、もっとも注力したのは自身が最初に創設した実践女学校と女子工芸学校でした。その意気は「ときはなる／色も深めて／ことくさに／たちまさらなむ／やまとひめ松」という和歌に表現されています。晩年は病気が悪化しますが、それでも学校では生徒に訓話をしたほど教育に熱心でした。一九三六（昭和一一）年に逝去しますが、最後の和歌が「まよひなき／正しき道は／見ず聞かず／言わずむなしき／空にみちたり」でした。



つきお よしお　１９４２年名古屋生まれ。１９６５年東京大学部工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。２００２、０３年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリーをしながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、白馬仰山塾、宮川清流塾、瀬戸内海塾などを主催し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に『日本 百年の転換戦略』（講談社）、『縮小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球共生』（講談社）、『地球の救い方』、『水の話』（遊行社）、『１００年先を読む』（モラロジー研究所）、『先住民族の叡智』（遊行社）、『誰も言わなかった！本当は怖いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』（アスコム）、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』（致知出版社）、『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本 地域創成の展望』（東京大学出版会）など。最新刊は『凛凛たる人生』（遊行社）。